

^ 13  
2906  
12





門 へ 18  
號 2906  
卷 12

昭和九年  
七月五日  
購求

春

春曉八幡佳年四編卷之三

明治十五年

江戸

鳥

永春水著

第廿三章

玉下げお根力山の翠ゆくあ海と直に陸より下げとく夫系  
集の編吟よりけんをもくお根の温泉六所謂塔の沢堂流るゝの下  
湯本を気質底倉若湯高とすとて千般七湯ありとふ湯坂  
流といふハ湯本と塔沢のるの山ありて終末の西あるは由今ハ  
九月の中旬とるの湯治の人由いと稀なるを往來終へるは



よ つき ぼん くらく こま ぼん さま  
夜の月へ 湖水も 光くと 木のる 枝りきく 朗よ 淋しき 心え  
方ぞ あきさき せよ ち 柳青の 島の 山崎 坂公う 建ひ 知る  
あふ 山崎 けき ち 坂公う けつ けつ けつ けつ けつ けつ けつ けつ  
て 柳青の 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う  
毒ふ あらう 柳青の 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う  
之 抱き 抱き 抱き 抱き 抱き 抱き 抱き 抱き  
狗が つき あげ せう せう せう せう せう せう せう せう  
と 柳青の 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う

一と 柳青の 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う  
は 柳青の 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う  
ぞ 柳青の 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う  
と 柳青の 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う  
う 柳青の 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う  
あふ 柳青の 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う  
が 柳青の 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う  
と 柳青の 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う 坂公う















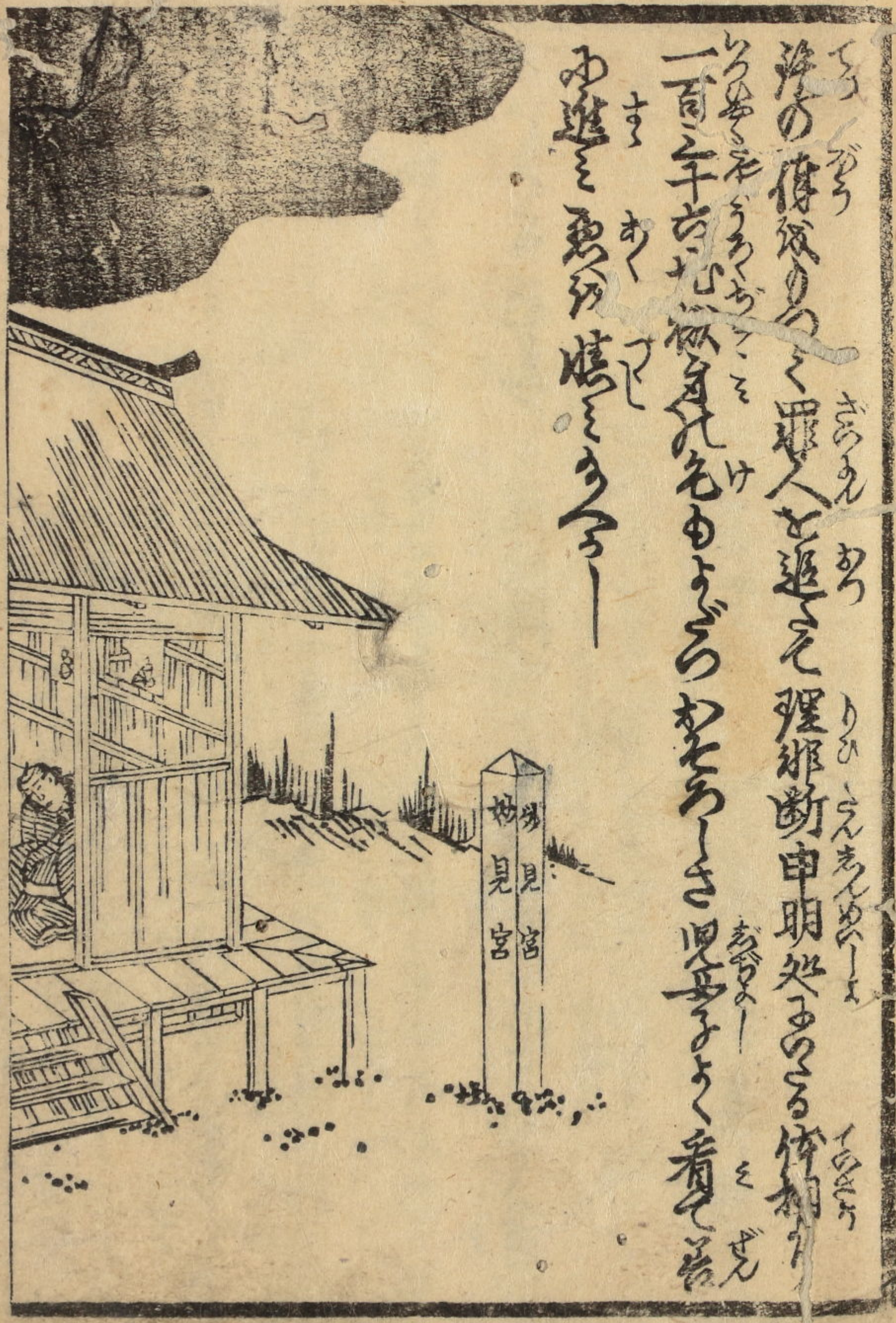








是く正業はまゝに為す侍ひてくらくかきえよく又  
 て操るにかり地ある中一その方とも時と後生と昔の  
 親を寄せ日長く方々の父母を不仕せしむる子育の  
 後と捕吉の如とりひ捕吉が親への切ある不仕せしむる  
 此のつと司令守命令一 招海息と弟一 冥官宗に  
 中の方と捕吉の如とりひ捕吉が親への切ある不仕せしむる  
 此のつと司令守命令令一 招海息と弟一 冥官宗に  
 中の方と捕吉の如とりひ捕吉が親への切ある不仕せしむる  
 此のつと司令守命令令一 招海息と弟一 冥官宗に



此のつと司令守命令令一 招海息と弟一 冥官宗に  
 中の方と捕吉の如とりひ捕吉が親への切ある不仕せしむる  
 此のつと司令守命令令一 招海息と弟一 冥官宗に  
 中の方と捕吉の如とりひ捕吉が親への切ある不仕せしむる  
 此のつと司令守命令令一 招海息と弟一 冥官宗に



時ふらうふ向方より一人の女は引まゝく角と抱きまゝる身は  
 ちのりあしへはさるるがう 漸く歩進ぐをんまは今まを青ら  
 きく飛ぶる老くわひまは果日るき女もれども苦痛は治る  
 やせわうへより白きまをより血を流して歩ゆか終る  
 情のくも進まなく 煙非断のうらむとつまもまをうく音  
 まはあさひふもたのけは 持音のひれが柳音のむら  
 変まゝもん ともども変むは引く人えとまかまは怒り  
 老の向方へ引まゝのけは 終るまゝいん方へ歩む

第 六 四 章

さくも 持は成はるひるひ 一 法師の古神通なる大徳は  
 中在りけんしと怒りき地獄とてぬり自生の樹成りし  
 今 園王の帳幕よりなるまゆく 地獄の体ねといふ六園王  
 より 園王の方にあつて 不の空のまを 罪りて 天のまを  
 まんどうち 一 陰とて 世あり 是ぞ 八大地獄と  
 南園王の下 三方二十由羅那をまゝく 身一が 智法



二ツも地獄獄身ぢごくごんが流ながる地獄獄身ぢごくごんは叫喚きょうげんちかく中なかの夫おつ  
叫喚きょうげん身みが六む焦熱せうねつぢかく身みが八はち焦熱せうねつを別わか  
地獄ぢごくとよこを別わかへ天てん地獄ぢごくあり地獄ぢごく獄ごくよ一ひとく別わかする地獄ぢごく  
十じゅうちかくふるふよめて一ひと百ひゃく年ねん六む地獄ぢごくとあるちかくく死しすふ  
いふまじり一ひとつとみか柳やなぎを六む身みの毛けゆよめつちかくちかくさふふさふふ  
志し一ひと七しち地獄ぢごく下の身みの獄ごくふまぢかくぢかく閻えん王おうの體たいを獄ごく置お下くだ其その  
獄ごく司し。僚りょう官くわん金神きんじん。司し源げん。祀神しじん。羅利らり冥官めいくわん。傾かたむ生せい神じんすべ  
罪人ざいじんの上うへをさうさう極ごくふ海神うみじんたをたをににつつちかくちかくの鬼おにどもを

の役やくは身みあすあす閻えん魔ま王おう獄ごく身み一ひととて秦しん魔ま王おう。初はつ江かう王おう。宗そう  
帝てい五ご官くわんと。夏なつ生せい王おう。奉ほう山さん王おう。平へい等とう王おう。郊きょう市し王おう。五ご道だう博はく論ろんと  
その事ことがごと一ひとくくおままぶぶ  
因いんにに一ひと閻えん王おう六む十じゅう王おうの中なかをを身み又また同どうふふありあり事こと  
まごも威い光こう嚴げんまま智ち智ち接せつ研けんるるゆゆ不ふ想じょう王おうとと獄ごくととを  
かしてまま大だい王おうの法はふををたりたりの方かた津つ願げん梨りのの後ご右みぎの方かた業ごうのの持もち  
とと儲たくわへへあるあるまま不ふ慮りょふふちちくく司し源げんのの人ひとのの性じやう向かう成じやうむむくくをを持もちたたふふ  
向かうのの後ご身みををららううたたふふ一ひとつつふふ持もちたたふふまますすててふふ不ふ慮りょふふまますすてて



神佛成なるをいふは、たのま 母親の徳が信む力の由  
徳あり再び古く申すつらまを獲生の後ハ然成西く  
あして後中をあらそふりする目まに要緊ふちて生救の  
因縁海よりバそいゆふ折者として子をあらさ中あれども  
同席に事おするゆゑ今程にふひふたれ終るも  
者ハ満りて事おふらうまをわつそれのこあも生生の徳によ  
つと柳吉六の事としてふま妻こ方より後ふむとて徳縁に  
かまらば徳縁とて罪縁はらば只柳吉と徳と切なるせに

形ハ是申すもいづらうして化縁むたれりたのま  
昔もふ方と春果ふするは、こえてあきりのあつたはれ  
のふらう方をおつあわらに秀らうとつあも徳縁とて徳を  
信むなづらまおふたあり罪縁と後より徳縁に徳と徳  
はまてゐるお者としてあめあ事と行るべし一方徳と徳と子  
とれむらぶらの申す徳縁の事ハなまに要緊ふちて  
再まの徳縁とて徳縁と徳縁の事ハ徳縁の事ハ徳縁と  
まらふ事よとまらうとまらうと淨願家の徳縁と向の徳縁と































大まきより  
 抑々其言の再會  
 對面さぐてよまを  
 讀編み著しく金  
 續編み著しく金

狂文亭為永春江補  
 一文合為永柳水校

金龍山人  
 狂訓亭為永春水作

英泉  
 靜齋英一画

春曉幡佳  
 十編卷之三

論本鉄





